



し
び
に
は
な
ら
ず

彼が、畑の向こうにある空家に越してきたのは、春のうららかな日のことだった。

その頃、空襲が酷い街から疎開してくるのは珍しいことではなかった。私の育った小さな村にもそういう疎開者は多くいたし、もともと村にいた者と疎開者は協力して日々の生を必死に生きてきた。

「こんにちは」

昼過ぎ、まだ五つばかりの私は居間で昼寝をしており、玄関からの声で目が覚めた。私の横で縫い物をしていた母と、その様子をへばりついてみていた七つ上の兄が立ち上がる。私は眠気眼で起き上がり、あくびを一つふわりとした。村の男手がなくなった以外には、海沿いにあるこの小さな村に、戦争との縁——戦闘機の爆音や火の雨などは無縁だった。

「バケモン！」

「こらっ」

兄の声と、それを窘める母の声がし、好奇心の強い私はのそのそと玄関に向かい、そこですっかり目が覚めた。兄が、玄関に立つ老女ではなく、その隣に佇む兄と同年ほどの少年を化け物と形容した理由もすぐにわかった。

少年の容姿はどこをどうとって、不思議としか言いようがなかった。私が着ている長兄から引き継がれているつぎはぎの浴衣でもなく、兄が着ている汚れた綿のシャツや裾の足りないズボンでもなく、彼はパリと糊付けされた真っ白の開襟シャツと、光沢があるように見える黒い半ズボンを召している。金色の髪の毛に青い瞳、このあたりの子ではありえないなまच्छろい肌。しかし、もっとも特筆すべきは、顔だった。左半分がケロイドのようになって、赤い盛り上がりがあるところを覆っている。火傷か何かなのか、彼の左半分の顔面は、右半分とはおよそ正反対の造形を保っていた。まだ幼い私でも、右半分の彼の顔はとんでもなく美しいことをすぐに理解したが、左半分の彼の顔は、とんでもなく恐ろしいものに見えた。両極にあるものがひとところに同居している。左の瞼はケロイドのせいでひきつっており、うまく瞬きができないようだった。ときたまひくりひくりと動いては、ほとんど丸出しになっている青い瞳を何度か覆い隠そうとした。

「申し訳ありません——」

母が震えた声を出した。声で謝りつつも、母もまた、少年の異形には驚いているようだった。「いいえ、お気になさらず……不慮の事故でこのような顔になってしまいました、手前が申すものはばかられますが……聡い子ですので」

老女がゆっくりと頭を下げた。同じ様に母も頭を下げ、ついでに兄の頭を押さえたが、兄はぼうっと少年の顔を見ていた。化け物と言ったくせに、改めて少年の顔を無遠慮に眺めている。だが、私ももちろん無遠慮に彼の顔を見ていた。美しいと思ったのだ。

「園村秋芳郎（そのむらあきよしろう）です。よろしくお願ひします」

彼の声は、鈴のようであった。言葉のつなぎ目も、流れ方も美しく、瞬時にして育ちが違う、というのを感じ取る。兄もきっとそうだったに違いない。母の手の押しに負け、兄はゆっくりと頭を下げたのだった。

秋芳郎は兄・幸次と同年だったが、学校に通ってはいなかった。朝、兄が学校へ行くのを見

送り、私は母の後をついて家の前にある畑へ行くと、隣の畑には秋芳郎と、祖母ではなく侍女であったおソエばあさんが畑を耕していた。彼は、自分の畑が終わると、我が家の畑も手伝ってくれ、いつも優しく私と母に接してくれていた。まだ十二の彼だったが、男手がない我が家にとって、手助けをしてくれる秋芳郎はありがたかったのだ。あの赤いひきつれも、見慣れてしまえばどうということはなく、兄の持っていた修身の教科書にも傷だらけで戦う兵隊の勇ましい姿は謳われていたので、そういうものをもつ秋芳郎も勇ましく見えたのだった。

私はすぐに秋芳郎に懐いた。畑仕事が終わると、すぐに秋芳郎の家に行き、彼の話聞かせてほしいとせがむ。兄や母からは聞けない、異国の話をいくつもいくつもしてくれた。上半分が人間で下半分が魚だという人魚の話、人間の少女を食おうとして狩人につかまり、腹に石を詰め込まれた狼の話、長い髪の毛を綱のように垂らして、高い塔の上から助けを求める王女の話。おソエばあさんが作ってくれたふかしイモを齧りながら、私は秋芳郎の美しい声が紡ぎだす物語に耳を傾けた。

話がつきる夕方に、見計らったように兄が迎えにやって来た。母に言われていやいや来るのだろう、縁側から、のそりと顔を出す兄は無表情で声も出さず、私が出てくるのを待っている。私より先に兄の存在に気付く秋芳郎は、私に聞かせる話をやめ、すと表情を消すのだった。その変化に気づき、私は兄の方へと駆け寄っていく。そこでやっと、兄は薄く微笑んで私の頭を撫でるのだった。草履を引っ掛けて、秋芳郎に暇のあいさつをすると、秋芳郎は朗らかに笑い、また明日、と言う。兄はわずかばかりに会釈をし、私の手を引いて十間も離れていない家に帰る。

私の知る限り、二人が話しているのは見たことがなかった。父や上の兄が徴兵で連れて行かれて以来、頼もしい兄を私は好きだったので、同じように好きな秋芳郎と仲良くしてほしかったが、上手くいかなかった。考えてみれば、兄は初対面で秋芳郎を「化け物」とのたまったので、それが兄の本心なのかもしれない。見慣れてしまえばどうということはないのに、と、幼い私はよく思っていたものだった。

初夏になり、緑が一斉に茂る季節になると素潜りがうまかった兄は海の浅瀬に潜っては、貝や小魚などを取ってきた。採れたものは私たちの生活の糧にもなり、また、野菜などと一緒に売って生活の足しにもなった。

兄が潜る姿は美しく、秋芳郎にも見せたいと思い私は彼を誘ってたびたび海に出た。秋芳郎を連れてやってくると、先に海辺にいた兄は無表情のまま、ふんどし一丁で海に潜る。きらりきらりと光る水面に兄の顔が浮かぶたび、私はわあわあと喜んだが、隣で座る秋芳郎はぼうっとして何も言わなかった。

「あ、バケモン！」

その日も、秋芳郎を誘って海に出ていた。沖の方では兄が泳いでおり、私は秋芳郎と一緒に砂の山を作っていたのだった。

驚いて振り向くと、私たちと同じように海に出ていた村の子供たちが、少し離れた場所から秋芳郎をそう呼んだ。秋芳郎はもう慣れているのか、知らないふりをして砂を指でいじっている。

「バーケモン！ バケモン！」

さらりと海風に秋芳郎の髪の毛がそよぐ。こんなにも美しいものを、私は見たことがない。瞬間、かつん、と、私の頭に何か当たった。頭を振ると、白い貝殻の欠片がはらはら落ちてくる。あっという間に貝殻が私たちに向けて放られ始めた。ぱちんぱちんとかまかい音をだして、貝殻がぶつかってくる。痛くはないが、なんと惨めなことだろう。私は立ち上がったが、秋芳郎の手が私の腕を引いた。冷たい指だった。

「お前ら！ 何しとんじゃ！」

兄が浅瀬に立ち、怒鳴った。

「幸次が怒った！ 来ると！ バケモンよりバケモンじゃ！」

「誰がバケモンじゃ！ さっさと帰らんか！ 家の用事でも手伝うとけ」

「バケモンと付き合う妹の兄も、バケモンじゃ！」

「あほ！ はよ帰れ言うとりじゃろが。伍代先生に言いつけちやるぞ」

兄がざぶざぶと海から上がり、雫をまき散らしながら大声を出した。貝殻の雨はやみ、子どもたちはきゃあきゃあと喜んで走って行く。伍代先生は軍隊上がりの恐ろしい男だと有名な訓導だった。海辺から離れ、子どもたちは丘道を駆け上がり、また二、三言なにか言っていたが、兄がうるさいとまた言うと、走って帰って行った。

兄は濡れた丸刈りの頭を乱暴に指で払う。私にも、おそらく秋芳郎にも、その水滴は降りかかった。冷たい、雫だった。

「今日は何もとれん。帰ろう」

兄は脱いであった服を拾い上げ、私や秋芳郎が何か言うより先に歩き出す。兄の背中では濡れていたせいもあって、陽光を受けてなめらかに光っていた。帰途の間も、兄も秋芳郎も無言のままだった。私は秋芳郎と手を繋いでいたが、その指は相変わらず冷たく湿気ているように感じた。ひくひくと、左目の瞼だけがぎこちなく瞬きをしている。

「……今日だけじゃあ、ないんだろ」

秋芳郎はそうつぶやいた。ずいぶん小さな問いかけだったので、私はそれが兄に投げかけられ

た言葉だと、兄が振り向くまで気付かなかったのだ。振り向いた兄は相変わらず無表情だったが、不意に私に向いて手を差し出した。

「公子（きみこ）、おいで」

「学校で、化け物と仲良くしているって、さっきみたいに言われているんだろ」

「公子」

兄は答えず、私だけを見ていた。黒々と焼けた手は私を待っていたが、なぜかそこから動けなかった。秋芳郎が一步、兄に近づく。兄は、彼を見ない。

「……秋芳郎は、バケモンじゃない」

どうにか振り絞った私の声は、泣きそうになって震えていた。咽喉の奥も、鼻の奥も、つんと痛くなる。兄ははっとして、手をひっこめた。

「……お前のその顔、どうしたんじゃ」

兄はぶっきらぼうにそう問い、そしてまた、歩き出した。私はまだ、秋芳郎の手を握ったままでいる。秋芳郎が私の手を握り返す。彼はその美しい声で、話しだした。どこかで、子どもたちの声がある。赤紫色の花を開かせたホトケノザが、海風に揺れていた。

「……死んだ僕の母は仏蘭西人で……国に帰ってきた父は今の母と一緒にになったけど……母様は、僕が、仏蘭西の女に見えると言って、おかしくなって、ひ、非国民と、言われて、それで、母様が、お湯、と、火箸を――」

「……そんなもの、バケモンじゃなかる。お前の母親がバケモンじゃ。しゃんと、胸張れ、男じゃろ」

兄の言葉に反して、秋芳郎はよろよろと前かがみになって、私の手を強く握ったまま、嗚咽を漏らしていた。

今になって思えば、秋芳郎があんな田舎にやってきたのは疎開というよりも、あの異形のせいだったに違いない。異形といって、ただ金色の髪の毛と蒼い瞳をもった美しさを、大人の惨めな嫉妬によって踏みにじられた。秋芳郎の心も、きっと踏みにじられたに違いなかった。秋芳郎に非はない。ただ、あの姿で町にいたとしても、遅かれ早かれ村にいるよりもっとひどいことになっていたかもしれないのだから、そういう意味では秋芳郎が田舎にいることはよかったのかもしれない。

あの日から、兄は海へ行くときに私と秋芳郎がついてこないように言い、その代わりなのか私が秋芳郎の家にいると迎えにくるついでに家に上がるようになった。家に上がる兄は何を話すでもなく、ぼうっとしていたが不満があるようにも見えなかった。秋芳郎は前のように兄がきても表情をなくすことはなく、むしろ私に話していた声にはどことなく張りを増し、とても楽しげに物語を膨らませるのだった。その頃になると、兄はいつのまにか秋芳郎のことを「アキ」と呼ぶようになっており、秋芳郎の方も、兄のことを「幸次」と呼ぶようになっていた。

ある夏の夜、私は僅かな気配を感じて目を覚ました。寢床の蚊帳が揺れたのだった。川の字になって眠っている母は静かに寝息を立てていた。私は反対側を見る。思った通り、兄の布団はもぬけの殻になっている。がさり、と、畑へと続く柘植が鳴った気がして、夏虫の大合唱の中耳を澄ませると、やはり誰かが歩いていく音がする。私は母を起こさぬようにゆっくりと起き上がり、そっと蚊帳を出た。

月が煌々と輝き、けざやかに辺りを照らしている。夏の夜独特の薄い熱を感じながら縁側に立つと、確かに兄の後姿が畑へと歩いていくのが見えた。そして、その向こうで待つ金色の髪の毛。間違いなく、秋芳郎だった。髪の毛が月光のせいなのか、もはや真っ白にさえ見えた。兄と彼は二、三言、言葉を交わして歩き出す。私はそれを、隠れ隠れしながらついて行った。月があまりにも綺麗だったので、夢の中なのではないかと思ったほどだった。

田畑の間を縫うようにある丘道を下りて行く途中から、二人の目的が何かわかっていった。海に出るのだ。日中、子どもたちに見つかるかまた貝殻を投げられるかもしれないからか、夏のむき出しの日差しが秋芳郎のケロイドによくはないのか、私にはわからなかったが、二人は砂浜に出、服を脱ぎ捨てると全裸のまま海に飛び込んでいった。

兄の黒い肌と、秋芳郎の白い肌はまったく対照的だった。兄も秋芳郎もずいぶん楽しそうに笑う。それがうらやましくて、うずうずとし、兄に怒られても構わないと、結局私は飛び出していった。兄は驚きの声をあげ、秋芳郎は始終笑っていた。

結果として、深夜の外出が露見して兄も秋芳郎も私もこっぴどく母に怒られたのだけれど、今までになく楽しい夏の思い出になった。私の人生で一番の思い出かもしれない。

それから一か月ほどして、終戦を迎えた。兄は学校で、私と母とおソエさんは村の集会所でラジオを聞いた。秋芳郎は外見を気にして家で待つといい、やってこなかった。私は、初めて耳にした天皇陛下の声にただただ不思議な気持ちになっていたが、母は涙をこらえており、おソエさんに至ってはその場に伏して泣き出した。周りの婦人方も口を押えるもの、おソエさんと同じように伏すもの、最後まで聞いておられずに外に出ていくもの、反応は様々だったけれど、それぞれの中の戦争は終わったのだった。

その後三年はあっという間に過ぎて行ってしまった。もともと空襲といった戦争の縁がほとんどないような村だったが、それゆえに生きている畑で採れる野菜などや海でとれる魚は町でも重宝された。休みの日には家族総出で秋芳郎の家の分と私の家の分の畑を耕し、売りに行くだけの野菜が整うと兄と母とおソエさんが町まで売りに行った。

私は新しくできた小学校に通い始め、兄は中学校に通い始めても、秋芳郎は相変わらず家にいた。けれども、彼の家には週に三日、三十路過ぎの男性が車にのってやってくるようになっていた。話を聞くと、秋芳郎の父が秋芳郎の勉学のためによこした「先生」なのだという。その時私は当たり前のはずの「秋芳郎の親」という存在に少し戦いた。秋芳郎にも父も母もいるのだ。兄にそのこと言うと、呆れたように笑って、「何を言っとるんじゃ」と私の頭を小突いた。けれど、彼も少し複雑そうな顔をしていたのだと、私は思う。家庭教師をこっちにやるぐらいなら、どうして迎えにこないのだろう。戦争は終わったのだから、疎開などもういいのに。終戦後、

父も兄も亡くなったという知らせがすぐに来て、お骨もないまま骨壺を受け取った私や兄にしてみれば、父親がいるというだけで羨ましかったものだが、しかし、本当に秋芳郎の親が彼を迎えにきたら、寂しくなるに決まっていた。

私は学校帰りに秋芳郎の家に行くのが日課だったが、その先生がくる日にはあまり行かなくなった。兄も、私はいなくても秋芳郎の家に行くのが常になっていたのに、やはり先生がいる日は行きたくないらしく、そういう日は二人で畑仕事を手伝ったり、海へ行って磯の貝などをとって遊んだ。ただ、兄も私もどこことなく気乗りせず、すぐに帰ってくることも少なくなかった。

先生の名は知らなかったけれど、とても嫌な感じがした。何度か、先生と顔を合わせたことはあったが、神経質そうな男で、頬は痩せこけていて色白だった。

秋口、冷たい雨が降っていた日のことだ。学校から帰ってくると、秋芳郎の先生が軒先で煙草を吸っていた。どうしても家に行くには、先生の前を通らねばならない。さすがに無言で通るのもはばかられ、なんとなく会釈をすると、先生はふふん、と口の端だけをゆがめて笑うのだった。

「あいさつもできんのか、こんな田舎のクソガキは」

「……こんにちは」

「……お前、俺がここに来るから坊ちゃんと遊べんと思って、俺のこと嫌ってるだろう」

学校の先生でもしない嫌味な言い方をしてみせる。私はむかむかとしたが、喧嘩っ早いことを兄にもよく窘められるので――おかげで、学校で秋芳郎のことを化け物と呼んでいた輩を、兄とは違ってこてんぱんにしてから、私も秋芳郎も彼らから陰口をたたかれることもない――、どうにかこぶしを握るだけにして我慢した。

「ところがどっこい、坊ちゃんはインランだからな、俺と一緒に勉強できることを喜んでるんだ」

先生は高慢ちきな笑顔（のつもりなのだろうがただ顔が歪んでいるようにしか見えなかった）を私に向けて、秋芳郎の家に入っていった。私はその背中が絶対に振り向かないところまで遠ざかったのを見てあっかんべえを何度もした。何度も何度もして、あんなやつをよこしてくる秋芳郎の父というのも一緒に嫌いになった。

母は町の親戚のところに用事があるとかで家にはおらず、私と兄だけの夕食だった。しとしと降る雨音とまざり、鈴虫の鳴き声が叢から聞こえてきていた。かちゃちゃとお椀のと箸のぶつかる音だけがする。先生が来ている日は、隠していても兄も少し浮かない様子ではあった。ふと、先生に嫌味を言われたことを思い出す。私はその時、兄とあの先生は嫌な奴だと言いついていただけで、何も考えずに話題を放った。

「きみ、やっぱり秋芳郎の先生は好かんよ」

「……どうしてじゃ」

兄はゆっくり視線を私に向ける。わかっているくせに、という風に私は言葉をつづけた。開け放った窓から、湿気で冷たい風がひよろりと吹いてくる。

「今日も、家の前で煙草を吸いよったよ。きみのこと、クソガキ言うちよった。そいで、俺のこと、嫌いじゃろって、笑って言いよるん」

「間違っておらんじゃろ」

兄は笑った。そこでやめておけばよかったのに、兄が笑ったことが悔しくて、語気を荒らげる。

「間違っちょらんけど、きみはあの先生嫌いじゃ！ 秋芳郎のこと、インラン言うちよったよ！
どういう意味なの、でもきっと、悪口じゃろ」

突然硬直した兄は、箸と茶碗を乱暴においた。鈴虫が鳴いている。私は、自分が兄を怒らせるようなことを言っただろうかと逡巡したが、それを遮るように兄の鋭い声が言う。

「そんなこと言いよったのか。あいつは」

「……インランでどういう意味じゃ」

「公子は知らんでもええ」

「けど」

「ええと言いよるじゃろ」

表情を変えることはなかったが、声が荒々しく響く。ぴちゅん、と、木の枝にたまった雨雫のこぼれる音がし、それに続いてぼたぼたぼたっと軒先にたまった雫もまた、こぼれて落ちていった。その反応だけで、悪い意味であるのは一目瞭然で、言っではならない言葉なのだろうこともわかった。

兄はしばらく黙っていたが、はっとしたように目を開かせる。

「おソエさんも、今日おらんじゃろ」

「母さんが町に行く言いよったら、ついでに行くって言うちよったと思う。町に、秋芳郎の父さんも母さんもおるんじゃるかー」

私の言葉が終わるより前に、兄は縁側から庭に出、雨に濡れるのも裸足であるのも構わず、秋芳郎の家の方へ走って行った。細かい雨がしとしと降る中、光のような速さで出て行った兄の背中を私は茫然と見つめていたが、とにかく追いかけてねばと思い立ち、傘を持って草履を引っ掛け、外に出た。陽が落ちてずいぶん寒く感じた。兄の白いシャツは薄闇の中でぼんやり光りながら、秋芳郎の家に突っ込んでいく。兄ちゃん、とつぶやきながら私も追いかける。汚れた足のまま兄が家に入っていった。そうしてすぐ、誰かが畳に倒れる音、怒鳴り声、また誰かが倒れる音がし、兄が叫んだ。

「何やっちよるんじゃお前は！」

「こ、幸次！」

「何するんだ！」

「お前こそ、アキに何しよるんじゃ！」

どん、と、誰かが倒れる音がする。室内に灯りはなく、私は縁側に回って恐る恐る障子を開けた。

そこには、先生に馬乗りになる兄と、兄を押さえる秋芳郎がいた。兄は鬼のような形相で先生を殴ろうとしている。その前髪から雨粒が落ちた。畳に倒れる音がしたのは先生が兄に突き飛ばされたかららしい。必死に兄の腕をつかんでいる秋芳郎は、着ていた開襟シャツが着くずれ、下半身は下着も脱げかけていた。ほぼ裸に近い。顔のケロイドは首から胸あたりにも続き、それとは別に、薄暗い中でも見て取れる赤い痣が、綺麗な右半身にいくつも散らばっていた。年端もいかなない子どもの私でも、瞬間、先生の煙草の痕なのだと気付く。秋芳郎は涙を流していたが、その左目だけは相変わらずびくびく痙攣して波打っていた。

「やめて、やめて、幸次、ぼくは大丈夫だから、幸次」

兄は息荒く、野良犬のように体全体で先生を威嚇している。鈴虫の声をかき消して、兄の息遣いだけがそこでする唯一の音だった。秋芳郎の声がどうにも届かない。

「幸次、大丈夫、幸次」

「兄ちゃん、兄ちゃん」

私も兄を呼んだ。先生はぎゅっと目を瞑ったまま萎縮して動かない。

「幸次、大丈夫だから」

「兄ちゃん」

何度も何度も呼びかけているうちに、漸く兄の腕からは次第に力みが取れて行き、殺気も収まってくる。先生もそれに気づいたらしく、ゆっくりと目を開け、兄の重心が動いた瞬間に急いで下から抜け出し、取るものもとりあえず玄関の方へ急いで逃げて行った。靴さえ抱えたまま外に出てきたのだった。そして私を見、ぺっと唾を地面に吐き捨てた。ぼやりと青白い先生からは、汗の嫌な臭いがした。

「片輪は片輪らしく、慰み者にでもなってりゃいいんだ。そんな醜い顔をしてても相手にされる

だけありがたいと思え！」

「何を！」

「幸次！」

またとびかかろうとする兄を押さえ、秋芳郎が悲鳴のような声を上げる。先生は逃げるようにして走り、井戸の脇にとめてあった車に乗ると荒々しく去って行った。

その後、秋芳郎を家に連れて行き、私は彼の煙草の痕に軟膏を塗った。沁みもするだろうに、秋芳郎はただ黙ってうつむき、たまに涙をすすめるのだった。雨はいつの間にかやみ、辺りを静寂が包む。鈴虫もはたと鳴くのをやめてしまった。ときたま、雨の雫がどこかからどこかへ落ちていく音がするだけで、私たちはしんとしていた。言葉の糸口もなかなか見つからない。

「……ごめん、ありがとう、公ちゃん」

薬を塗り終わり、シャツを着なおしながら秋芳郎はそうつぶやいた。私は何とっていいかわからず、相変わらずだんまりを決め込んでいる兄を見やる。その視線に気づき、兄は畳から顔を上げた。

「なんで、言わなかったんじゃ」

「……言えるわけないだろう、そんな……男に乱暴されて……」

秋芳郎の声は震えていた。

「兄ちゃん、秋芳郎のこといじめちゃいかん」

「兄ちゃんは秋芳郎に話とるんじゃ」

とはいえ、自分の語気が強かったのを反省してか、兄はまた口をつぐんだ。

「……最初は、顔を触らせてと言われたから、触らせていたんだ。そう言って、させていれば、大抵気の済む人も多かった」

幼くして顔が凄惨なものになってしまった秋芳郎にとって、「言われるがままにされる」ことは一つの処世術だったに違いないのだ。彼が十二でこの地に来るまで、以前の土地でどんな扱いをされてきたのかは知らない。けれど、小さな村の子どもでさえ彼を化け物と呼んだ。幸い、彼らは兄や私が怒り諭せば言うことを聞いたし、村の人も優しい人が多かったためと秋芳郎の生来の穏やかさもあって、すっかり村にはなじんでいた、が、ここよりもっと大きな場所だったらどうだろう。彼は疎開と称して、老いた女中一人だけを伴ってここにいる、そのことが物語っているような気もした。

「僕が悪いんだ、母様のことも、先生のこと、僕が、こんなだから」

秋芳郎はうなだれ、畳に一、二粒の染みができた。小刻みに震えている。兄はそれを見、はじかれたように立ち上がり、卓袱台に僅かにぶつかってもひるまず、秋芳郎に寄り添い、抱きしめた。出たままだった夕食の茶碗や箸が、兄のぶつかった衝撃でがちゃんと音を立てる。

「……バケモンじゃなかる。お前はなんも、悪くないじゃろが」

兄の、押し殺した声も、僅かに震えていた。秋芳郎が大声で泣き出す。白い頬は紅潮し、しっとりと濡れていた金髪はより艶やかに輝く。秋芳郎は、美しかった。

三か月ほど経った、寒い夕方だった。雪がちらついて、板張りの縁側がすっかり冷え切っていた。土間から、母の炊く煮物の甘い匂いが香ってくる。

「ごめんください」

秋芳郎の声だった。兄が立ち、出ていく。私は炬燵に入って、障子の向こうの雪を眺めていた。兄の声はぼんやりとしか聞こえなかったが、ふとききなれない男性の声がした。まさかあの家庭教師が来たのかと思ったが、先生よりも優しげな声音だった。あの件以来、先生はとんと姿を見せなかった。対照的に、兄と秋芳郎の距離はとても縮まったようにも思えた。

「母さん、母さん」

兄は居間を通り抜け、土間の方へ行く。私は炬燵から出、土間の様子を見に行くと、母も驚いたように兄の後をついて、また玄関へ行く。私もそれについて行った。玄関には、黒い背広を着た渋みのある御仁が秋芳郎とともに立っていた。彼の父親だと分かった。秋芳郎が引っ越してきたあの日、綺麗な開襟シャツにしつけの良い半ズボンに召した秋芳郎の雰囲気と、まったく同じ様子であった。ああ、育ちが違うのだ。そう思われる。山高帽をかぶっていた秋芳郎の父はそっと帽子を外し、割烹着姿の母に恭しくお辞儀をした。

「秋芳郎の父、園村源一郎（げんいちろう）と申します。平生から息子が、本当にお世話になりましたー」

いつまで経っても顔を上げない父親の腕を、秋芳郎がそっと引っ張った。

「急なお話ですが、幸次くんを私の養子にさせてもらえないだろうか」

夜になり、強くなった風に窓が音を立てる。母は驚きすぎたのか、兄とよく似た無表情の顔のままである。兄も何も言わない。ただ、向かいに座っている源一郎氏も、秋芳郎も、真剣な顔でこちらを見ていた。こうしてみると、源一郎氏と秋芳郎はよく似ていた。

貧乏で殺風景な居間に、仕付けのよい洋服を着ている源一郎氏が座っているのはとても滑稽だった。そしてその隣に座る秋芳郎も、今日は珍しく着物ではなく開襟シャツに小豆色のセーターとズボンをはいていたので、二人してこんな粗末な部屋にいるのがおかしく思える。母は、欠けた湯呑である無礼を詫びてからお茶を出し、兄は学生服の詰襟を正した。私はそろそろと正座をし、居間に嫌な沈黙が流れる。なぜか、源一郎氏の口からよくないことが聞かれるような気がする、と、私たち三人がみんな思っていたからかもしれない。例えばそれは、秋芳郎を町へ連れて帰るとか、兄があつた家庭教師を殴ったから捕まえるとか、そういう話だと思っていたので、まさか養子にしたいという申し出だとは思ってもみなかった。

「倅とは、手紙のやりとりをずっとしてね。君のこと、公子ちゃんのこと、よく書いてあった。本当に、息子のことを助けてくれて感謝しています。ありがとう。安藤の……家庭教師のことは本当にすまなかった。迷惑をかけたね。ときに幸次くん」

源一郎氏は兄の顔をまっすぐに見つめた。兄も、視線を逸らさない。

「進学がしたいのだってね。君は学校でもとても成績が良いそうじゃないか。どうだ、一つ、社会勉強もかねて家に来る気はないか。君が園村家に入るのであれば、お母様や公子ちゃんにも援助をしよう」

兄は答えない。進学がしたいという話自体、母も聞いていなかったようだ。兄は今年中学校を卒業したら、町の指物屋に住み込みで雇ってもらう予定になっていた。戸惑ったように兄の横顔を見つめる母と、同じく兄を見ていた私と目が合う。

「……奥様、失礼なお話だが、進学する余裕はないでしょう」

「……お恥ずかしいお話ですが……」

「いいえ、あなたのご主人もない中で立派に幸次くんと公子ちゃんをここまで育て、二人ともとても良い子に育てているではありませんか。秋芳郎は幾度も彼らに助けられました。私は、小さいけれども商船会社を立ち上げておまして、常人に比べれば他人と顔を合わせて、即座にその者が信頼に値するかどうかを判断せねばならんです。もちろん、倅の話だけでは、幸次くんや公子ちゃんを信ずるに足るかはわかりません。けれども、今日、顔を見てよくわかりました。二人ともとても良い子だ。私は、ぜひとも、幸次くんに自分の会社を渡したいとさえ思い――」

「秋芳郎はっ、」

黙っていた兄が源一郎氏の言葉を遮り、切羽詰まった声を出した。秋芳郎がふと顔を上げる。青い瞳が、兄を見つめた。

「……秋芳郎は、どうするんです。僕ではなくって、あなたは、秋芳郎を、あちらに連れて帰るべきです」

「秋芳郎からの、たったの希望でもあるんです」

兄は秋芳郎を見た、が、言葉を交わすことはなかった。

その日、私たちはただ戸惑うばかりで、結局、源一郎氏の提案に返事をする事ができなかった。

「すぐに答えが出ることではないのはわかっています。急に來た非礼をお許してください。お暇いたします」

源一郎氏はまた深々とお辞儀をした。ともに帰ろうとする秋芳郎を、兄が引き止める。

「話がある」

中で話せばええんに、と、母は心配そうに呟いた。

土間からは、庭で話す二人の様子はよくわからない。遅くなってしまった作りかけの夕食を手伝いながら、私は母に問う。

「母さんは、兄ちゃんが秋芳郎の父さんに連れて行かれたら嫌じゃろ」

「……父さんも兄さんもおらんと、幸次には頑張ってもらっちゃよろし……中々、満足には……何もしてあげれんから、母さんは、それで、幸次が幸せになるんじやったらええと思う。あの子が決めたことに、母さんは口出しせんよ。公子は寂しいじゃろう」

「きみは、兄ちゃんがおらんでも、秋芳郎がおらんでも寂しい。……なんで、秋芳郎のお父さんは、秋芳郎を連れて行かんのじゃろ」

母は、しゃもじによく炊けた大根を乗せ味見をし、ふ、と微笑んだ。しわが増え、年を取ったように見える。

「お家にはお家のことがあるんよ。おいしくできた。幸次と秋芳郎君を呼んでき。風邪引いてしまっちはいかんじゃろ」

うなずき、土間から庭に出た。二人は粉雪の中で立ったままでいた。兄は私に背を向けるように立っており、こちら向きに立つ秋芳郎と目が合った。彼の頬は寒さゆえに朱色に染まり、口から出る息は白く染まっていた。はっと息をのむほど、秋芳郎のたたずまいは美しかった。

このところ、秋芳郎の美しさはますます磨きがかかっていたようだった。爛れていない右側の顔は絵画のように美しく、金色の絹糸のような髪の毛はゆるやかに流れ肩にかかっていた。蒼い瞳は以前よりも深く濃くなり、海のように穏やかだった。爛れた左の顔すら、右の顔と合わせて、さらに彼の美しさが際立つ。兄が小学校を卒業するころに二人とも背が伸び始めてから、兄は遅しく、秋芳郎はしなやかになった。二人が一緒にいる時間が多ければ多いほど、対照的だと思った。兄は朝が似合い、秋芳郎は夕方が似合う。兄が澆刺と笑えば、秋芳郎は控えめに微笑む。私はそういう二人を見ているのが好きだったが、源一郎氏の訪問で、何かが微妙に軋んだのかもしれない。

私の姿を認め、秋芳郎は口をつぐんだのだが、興奮しているらしい兄は私の足音に気付かず、秋芳郎に近寄り彼の肩をつかんだ。金糸のような髪の毛が、ふわりと踊る。頬が凍てつくように寒く、私はなかなか兄に声をかけられない。

「なんでじゃ、お前、本当は寂しかったじゃろ、なのになんで俺が、よっぽどアキの方が頭も良いじゃろ、なのになんで、」

「その方が、僕も、幸次も、藺村の家も幸せだよ。僕は、こんな見た目だから表舞台には出られない。おばさんや、公ちゃんには悪いけど、幸次は、こんな田舎でいるのはもったいないよ」

「そんなことは、お前が決めることじゃない」

「……母が亡くなったそうだよ。それで、父も最初は僕を藺村の家に戻すことを考えたみたい、だけど、僕は、幸次に藺村の家を継いでほしいと思った。君以外にいないよ」

「だから、そんなことは」

秋芳郎は、確かに私を見て微笑んだ。

「大切な人の幸せを願うことの、何がいけないの」

白い息が、紛れて消える。

「ここで、おばさんと公ちゃんと一緒に暮らし続けることも、幸せかもしれない、けれど君はもっと、外の世界も知りたいと思っている。僕に、嘘はつかないで」

兄はうなだれた。振り絞るような声がする。

「……お前の、そばにいたい」

「君の幸せはきっと、僕の傍にいることじゃないよ」

兄の手が、秋芳郎から離れ、距離ができた。そして、土間に向かおうとしてこちらを振り向き、やっと私の存在に気付いた兄は、少し驚きながらも私の頭をぽんぽんと触り、何を言うこともなく家に戻っていった。肩に残っていた粉雪がさらりと落ち、私の鼻先をかすめる。冬の香りがした。

「……ごはんできた」

「ああ、ごめんよ、僕は家で食べるよ。おソエさんが待っているんだ……公ちゃん」

秋芳郎が腰をかがめ、両手で私の頬を挟んだ。その手はまるで氷のように冷たかったのに、湿ってもいて、悲しくなる触感だった。思わず泣きそうになる。秋芳郎もまた、泣きそうな顔をしている。蒼い瞳に私が映っていた。私も彼の爛れた肌に触れる。ぼこぼこ膨れ上がった皮膚は、作り物のようにつるりとして、弾力があった。

「兄さんがいなくなったら、寂しいかい」

「……ううん」

「僕のこと、ひどいと思うかい」

「……ううん。私、兄ちゃんのこと、秋芳郎のこと、大好きじゃ」

「公ちゃんは、強いね」

秋芳郎の涙は、私の指を少しだけ濡らした。

兄が正式に源一郎氏の養子に入ったのは春のことで、それと同時に彼はこの家から、村から、出て行った。秋芳郎の生家はここよりもうんと遠い、県をいくつも越えた場所にあるという。ようよう会えなくなると思うと、私も母も涙をこらえられずにいたが、秋芳郎だけは気丈で、兄が出発する日の朝も、ただ穏やかに彼のことを見送った。

兄からは、二週間に一度か三週間に一度か、必ず手紙が届いた。住まいの様子、家族の様子、学校の様子を簡単に記した手紙からは、兄の生活がここにいた頃よりも充実していることが伺われた。そして私や母や、秋芳郎やおソエさんのことを気にかけて文章が続き、なかなか帰れないことを謝る文章で手紙はいつも終わった。秋芳郎にその手紙を見せると、彼はとても嬉しそうだった。

「彼の字で、僕の名前が書いてあることが嬉しい」

「秋芳郎は変なところで喜ぶの」

「とても名誉なことだよ」

「そうじゃるか」

「そうだよ。ねえ、公ちゃん、僕に手紙をくれないかな」

「兄ちゃんに言って、秋芳郎にも手紙を書くようにしたらいいんじゃない」

「ううん、そうじゃなくって、この手紙がほしいよ。いいかな」

母に尋ねると、いいというので、私は兄から手紙が届くたびに秋芳郎にそれを渡した。秋芳郎は手紙を大事そうに読み、仏蘭西人のははおやか、もらったという飴色の箱に丁寧にしまった。私は何度も、秋芳郎にだけ手紙を書くように兄に返事を送ったし、秋芳郎にも兄に手紙を書くよう何度も催促したのだけれど、二人になかなか聞き入れてはもらえなかった。

私が中学二年生に上がった年に、おソエさんが亡くなった。冬頃から風邪をこじらせていたのだが、良くなりず秋芳郎と私と母に看取られ、初夏におソエさんは旅立っていった。私たちはすぐに藺村家に電報をうち、翌日の夕方には源一郎氏と兄が駆けつけて、おソエさんの死に顔を見ていくつかの言葉をかけていた。

中々忙しく、帰ってこれない兄を見たのは一年ぶりで、二十歳を過ぎた彼はますます男としての磨きがかかったようだった。村中が若葉色に染まる季節だからよけいにか、そう見えた。こんな田舎に住んでいる私でも知っている、名の通った大学に通っているのは手紙で知っていたけれど、都会になれた兄を見るのはとてもまぶしい心持ちがした。

質素な葬儀が一通り終わり、兄は私と母と家へと戻った。おソエさんを茶毘に付したら、遺骨はおソエさんの国の親族に送るといことで源一郎氏はもう話をつけているらしかった。とうとう秋芳郎が一人になってしまう、と、兄は家への道すがら、ぼそりとつぶやいた。

母が入れてくれたお茶を飲みながら、兄は土産だと言って母には化粧品を、私にはいくつかの小説本を持ってきてくれた。私はすっかり本の虫になっていて、学校の数少ない蔵書も読みつくしてしまっていたので、たまに帰ってきた彼が買ってきてくれる小説を待ちわびていた。

男手だけでは夕飯も取れないだろう、と、母が気遣って秋芳郎の家へ出ると、兄は訛りもない言葉で秋芳郎の様子をそっと尋ねてきた。兄が働くはずだった指物屋で働き始めた秋芳郎は、頭の良さとは違って不器用だから、中々苦勞をしているようだが、気のいい彼だから、主人には気に入られていると言うと、兄はほっとしたようにする。私は何べんも繰り返していることを、また言う。

「そんなに気になっちゃんなら、秋芳郎さんにも手紙書いちゃってよ」

「家に書いているんだし、家は目と鼻の先だろ。おじさんも、ちゃんと筆まめに秋芳郎には手紙をよこしているんだし、僕が描く必要はないよ」

「ふん、僕、なんて気取っちゃって」

「そう、意地悪言うなよ」

兄は、自分が買ってきた小説を手持無沙汰に手繰り寄せ、頁をめくり、閉じ、また、めくり、を繰り返す。伏し目がちになる顔はどこか浮かないで、それはおソエさんが亡くなったからというわけではないことぐらい、私にもわかっていた。

「……藺村のお家は、楽しいの」

「ああ、それはもう。毎日勉強の日々だけど。前にも手紙に書いただろ、廊下には、仏蘭西人の肖像画があつてな、秋芳郎の母だそうだよ」

彼は優しい微笑みを浮かべた。

「秋芳郎は母上に似たんだな。とても、美しい人だよ」

「……秋芳郎さんに、手紙を書いちゃってよ。好きなんじゃろ」

兄は驚いたように目を見開き、私を見つめたが、すぐに観念したらしい。否定もせず、肯定もせず、私の頭を撫でた。兄の手は、いつも大きく温かい。

「お前も、大人になったんじゃな。おソエさんがなくなって、秋芳郎は一人になるじゃろ。公子

、ちゃんと面倒見てあげんよ」

「秋芳郎さんはもう、とっくに立派な大人じゃ」

「寂しがり屋じゃからな、あいつは」

兄の顔の方が、よっぽど寂しげに見えた。

おソエさんの遺骨が骨壺に詰められ、源一郎氏だけが先に帰っていった夜のことだ。少し蒸し暑く、縁側の窓を開けて蚊帳をつるして眠った。久しぶりに家族三人が川の字になり、兄の普段の生活の話や、私の学校の話、源一郎氏の援助のおかげでどれほど生活が楽になったか、など、手紙では足りない言葉を、お互いに話していた。兄は大分背が伸、布団から足がはみ出ている、それがおかしく、母が寝付いてからも私と兄はそれでくすくすと笑いあった。

いつの間にか寝付いていた私は、ふと、急な既視感に襲われて目が覚めた。眠っていたのに既視感、という、可笑しい気分だが、それは確かに既視感だった。眠っていて、目が覚めるところからもう、私は以前、一度だけそれを経験したことがある。蚊帳が揺れており、隣に眠る兄はいなかった。

あの夜だ。兄と秋芳郎が、こっそりと抜け出して海に入ったあの夜。私は母を起こさないようにゆっくりと起き上がり、けれど、すぐに人の気配を感じてまた横になる。あの夜と違うのは、すぐそこの縁側で、兄と秋芳郎が並んで話していることだった。ぼそぼそと、二人の声が聞こえてくる。

「――幸次、あっちに行ったらすっかり訛りがとれたと思ったけど、また戻ってるね」

「そうじゃな、ここにいると、やっぱり俺は俺って感じがする」

「そうかい」

「.....お前が、育ったあの家も、居心地は悪くないが、お前が、おらん」

「駄々っ子みたいなこと、言うね」

「おじさんには目いっぱい感謝しとるんじゃ。母さんのことも公子のこともようしちよって来て、本当に感謝してもしても足りんくらい。けど、どうしても、お前を迎えにいかんことが、俺には、納得できん」

「.....幸次は、優しいから」

「お前が、優しすぎるんじゃ」

「.....僕の生みの母は、僕を生んですぐに亡くなったけれど、生んでくれて良かったと思ってる。僕にこんな傷をつけた母のことも、僕を遠ざけた父のことも。全部が巡り巡って、僕はここにいるんだ。ここの生活が好きだ。おばさんも、公子ちゃんも良くしてくれる」

寝付こうとしても、二人の会話が気になってどうしても寝付けない。はしたないことをしているとわかっていても、胸がざわついて眠れなくなってくる。

「それに.....幸次が立派に菌村の家を継いでくれることが、僕はとても嬉しいんだよ」

「.....アキ、俺には今、許嫁がいる」

秋芳郎がはっと息を呑む。なぜか私も手のひらに汗をかいた。

「言わんといかんと、思っちゃった。手紙を書こうと、思っちゃった。でも、書いて、お前から

の返事が来て、お前の字を見たら、俺は絶対に会いたくなる。ここに帰りたくなる。……お前を、抱きたくなる」

兄の声は、震えていた。

「でも、そんなことはできん」

「……」

秋芳郎は何も答えない。沈黙の中で、木々の揺れる音がする。

「……俺は、お前が好きじゃ。愛しとる」

「幸次、なんで」

「でも、俺は、許嫁と結婚する。おじさんへの義理もあるし、彼女自身も器量の良い人じゃから、俺のことを支えてくれると思っちょる。でも、秋芳郎、お前への気持ちも、本物じゃ」

「でも、僕は男で、こんな顔で、」

「そんなもん、関係ない、言うちょるじゃろ。お前が好きじゃ」

兄の声は穏やかに、でも、確かな響きを持っていた。また、沈黙。すす、と、衣擦れの音がして、二人の距離が近づいたことを思わせる。

「……でも、どうしようもない」

「迎えにくる」

「何を」

「お前を、迎えにくる。絶対、何年かかっても、何十年かかっても、お前を迎えにくる」

「……そんなの、みんなを裏切ることになる。そんなことは絶対にダメだ」

「だから、恩を返してからだ。会社を大きくして、孫の顔を見せて——だから、何年かかるのか、何十年かかるのか、わからん、でも、きっと、お前を迎えにくる。そのときは、誰を裏切っても、お前を迎えにくる」

「そんなの、そんなのは、君の幸せは、僕の傍にいることじゃ——」

「俺の幸せは俺が決める。だから、秋芳郎、お前も自分の幸せは自分で決めろ。人の言いなりになるんじゃなく、お前は、どうなんじゃと聞きたいんじゃ」

「そんな……」

沈黙のあと、秋芳郎の震える声が言葉を紡いだ。

「……聞かないでも、わかってるだろ……ずっと、今でも、これからも大好きだ」

「……お前が、好きだ」

穏やかな沈黙が続いた。

私の目から涙がこぼれた。どうして、二人はこんな風に辛い道しか残っていないのだろう。どうして二人は、愛し合ってしまったのだろう。私は、布団の中で声を押し殺して泣いた。

どうしてこんなにも、二人は美しいのだろう。

「え、そんでこれ、どうなんの」

「終わってないよ」

僕がそういうと、秋吉はえええ、と悲愴な声を出した。古びた原稿用紙を顔に近づけたり離したりしている。傷むからやめてよ、と、言う、と、畳から起き上がって、僕の方へ原稿を渡してきた。大切に受け取り、封筒に入れると、「いるもの」と、秋吉のへたくそな字が書かれた大きな段ボールに入れる。

「ていうか、ごろごろすんのやめてくれる？ あっちの筆筒はまだ手も付けてないんだから、ちゃっちゃとやる」

「いいじゃん、主はもうてっちゃんじゃん」

「まだまだ、遺品整理しないと祖母ちゃんに失礼でしょうが」

「てっちゃんのそういうとこ好きだよ」

秋吉がイチャつこうと首に手を回してきたので、簡単にキスだけ済ませる。ぶうぶう文句を言う彼を残し、僕は庭に出て伸びをした。埃っぽい部屋に一日いたので、鼻がムズムズする。普段住んでいる東京とは違い、ここはすぐ目の前に海があり、後ろには山があり、空を切り取ってしまう電線が全くない。祖父ちゃんと祖母ちゃんが出会い、少しずつ改築して、じわりじわりと面積を広げたこの平屋で、僕と恋人の秋吉は来月から暮らし始める。

三年ほど会っていない祖母ちゃんが亡くなったと連絡があったのは、つい先日、仕事中の打ち合わせをしているときのことだった。それも、五年以上連絡を取っていなかった母親からの電話だったので、祖母ちゃんが亡くなったことよりも僕はそっちに驚いた。端的な電話で、祖母ちゃんが地元の病院で亡くなったこと、お葬式ももう終わっていること、声をかけなかったことの詫び、祖母ちゃんが住んでいた家が残っていること、遺品整理をすることを条件に僕がそこに住んでもいいということ、が伝えられた。祖母ちゃんの一人娘の母、そして一人息子の僕。祖父ちゃんもいないし、父はそういうことに無関心なので、母か僕がやることになる、とも、母は何の感情も込めずに言った。

僕がゲイだとカムアウトしてから、父も母も僕と関わりを持ちたくないらしく、大学を卒業して家を出てから今まで、全く連絡をよこしてこなかった。遠回しに、僕と恋人がその家に住んでくれたら、自分たちが会いにいかない限り合わずに済むんだけど、と言われていたような気になった。彼らの思惑はよくわからないけれど、僕はその時住んでいたマンションに秋吉もやってきて手狭になっていたのもあり、二つ返事で承した。それに、職業柄、人の人生を覗き見ることができるかもしれないという汚い好奇心もあった。引き受けた理由はむしろそっちの方が強い。

祖母ちゃんは名門の女子大学を出、新聞記者を経て小説家になり、それなりに名を馳せ、そして幼馴染みらしい祖父ちゃんと結婚した。というのは、祖母ちゃんから聞いたわけではなく、学生の頃に読んだ祖母ちゃんの特集記事から得た知識だ。実際、祖母ちゃんの生い立ちなんかはほとんど聞いたことがない。

三年前か四年前、僕も文筆家の端くれとなったときに、仕事で東京にきていた祖母ちゃんがお祝いをしてくれた。ホテルのラウンジカフェで孫作家期待のデビュー、などと恥ずかしい帯の付いた小説を渡すと、祖母ちゃんはたいそう嬉しそうにしてくれたのだった。

「……うちは貧しかったから、私が中学生のときに、兄さんはもう家を出ていて、他の人の養子になっていたんだけど……お土産だって、ご本をよくかってきてくださって。嬉しかったなあ。今、その気持ち」

初めて聞く話だった。祖母ちゃんに兄さんがいたことも知らなかったし、その人が養子に入っていたことも知らなかった。

「祖母ちゃん、兄さんがいたの？」

「そうだよ。秋芳郎さん……祖父ちゃんと同じ年のねえ、優しくて、頼りのある兄さんだったよ。一番上の兄さんも小さいときに亡くなって、その次の兄さんも父さんも戦争で亡くなったからね、幸次兄さんが、お父さん替わりでもあったねえ」

僕の好奇心はくすぐられ、やわらかいソファから身を乗り出すようにして祖母ちゃんの話に聞き入る。

「祖父ちゃんの顔、あんたは知らないね」

「写真でしか見たことない」

祖父ちゃんは、母が小学生のときに家を出て行ったと聞いた。記憶のあるはずの母は、自分に興味がない人のことは私は興味ないの、と驚くべき台詞を吐き、だから恨むとかそんな感情すらないと聞いたことがある。いつだか、祖母ちゃんの家を訪れたときに見た写真の祖父ちゃんは、右側の顔は仏蘭西人のモデルのような顔をしているのに、左側の顔は無残に焼けただれたようになって、火傷特有の痕が残っていた。でも、目は優しく、何より、その写真で一緒に映っている祖母ちゃんもとても穏やかな顔をしているので、良い人なんだろうと思っていた。

「兄さんが養子に入ったのは、祖父ちゃんの父様のところだったんだよ。祖父ちゃん、顔が爛れてたからね、本人は悪くないことなのにね、あれで大層苦しめられたのね。祖父ちゃんの父様の仕事のことだってね、私と兄さんの田舎に来たの。それでね、うちに援助をもらう代わりに兄さんが養子になってことでね、兄さんも、よくできた人だったからね」

「祖母ちゃんは、祖父ちゃんのことを恨んだりしてないの。まだ生まれたばかりの母さんをおいて出てっちゃったのに」

「恨んでないよ」

悩む暇すらなく、すぐに答えがきたことに驚く。

「祖父ちゃんは、優しい人でね、いろんなことを許す強さを持っていた人だった。そういう祖父ちゃんを、私は好きだったからね。それに、祖父ちゃんの指物の稼ぎより、祖母ちゃんの文章の方がお金になったからね。祖父ちゃんは中身も見た目も美しい人だったけど、勉強以外はからっきしダメだったから」

祖母ちゃんはくすりと笑い、ラウンジの窓から外の通りを歩く人の姿を見つめた。今朝、梅雨明け宣言が出されたこともあって、皆半袖や丈の短いパンツやスカートを履いて、これからくる夏を予感させる。ホテルの自動ドアが開くたび、離れたここまで、街路樹の若葉の香りがした。

「この季節になるとね、色々思い出すね。最近、思い出すことが多くって、年とるってやだねえ。てっちゃん、今度、祖母ちゃんところにも遊びにきてね」

「うん」

「これも、ちゃんと読むからね」

「それはどっちでもいいや」

今日はそのままホテルに泊まるという祖母ちゃんと別れを告げると、祖母ちゃんはそれと、と言葉を継いだ。

「てっちゃん、綺麗になったね」

「え？」

「恋をすると、人間綺麗になるからね」

祖母ちゃんはにこにこして言う。何となく恥ずかしい心持のまま僕は秋吉の待つマンションに帰った。

それから、祖母ちゃんが亡くなるまで、小説の簡単な感想がパソコンに送られてきただけで、言葉を直接に交わす機会はなかった。

いざ祖母ちゃんの家に行ってみると、本の多いこと多いこと。中には大層黄ばんでページがほろりと崩れてしまいそうなものがいくつもあり、そういうものは潔く捨てることにした。祖母ちゃんは、パソコンが使える癖に原稿はずっと手書きで、マニアなら泣いて喜びそうな原稿の束も貯めてあって、それらも捨てることにした。到底一人では片付けられないと思いながら、様子だけでも見ようと押し入れを開けたときだった。

「なんだこれ」

綺麗な飴色の物入れがあった。鳶を象ったような彫り物がしてあって、持ち上げると思いのほか重い。そっと開けると、年季の入った黄ばんだ封筒と、半分に折られた原稿用紙が出てきた。封筒の宛名は女性の名前と、祖母ちゃんの名前の連名になっていて、差出人は県外に住む「幸次」という男性だった。養子に入ったという祖母ちゃんの兄だろう。封筒にはもちろん便箋が入っており、綺麗な文字で日々の出来事や、祖母ちゃんと女性——おそらく母親——と、秋芳郎——祖父ちゃんと、そしておソエさんという女性を気遣う文章が連なっていた。すべての手紙が同じ様に書かれており、丁寧で、大叔父がとても几帳面な人だということが伝わってくる。

手紙が送られてくる消印の日付は次第に伸びて行き、一年になり、三年になり、最後の手紙とその前の手紙の間は、十数年年以上あいていた。その時の宛名は祖母ちゃんの名前だけになっている。

『公子、悪い。恨むなら俺を恨んでくれ』

短い文章は走り書きのように揺れていて、今までの「幸次」大叔父とは印象が違い、明らかに何かがあったようだ。それでも、祖母ちゃんの話からは大叔父や祖父ちゃんへの恨みなんてものは何も感じなかった。

手紙を丁寧にしまい、原稿用紙を広げると、また封筒が落ちてきた。その場に腰をおろし、まずは原稿用紙を読み始める。ぱっと見で祖母ちゃんの筆跡というのはすぐわかったが、若さが残る文章だ。読み進めてすぐ、祖母ちゃん視点の、祖母ちゃんと祖父ちゃんと大叔父の話だとわかる。さして巧みなわけでもないその話に食い入るように読み、気付けばもう東京に戻らねばならない時間だった。僕は原稿用紙も物入れに戻し、落ちてきた手紙だけをカバンに入れて、やはり思い直してまた原稿用紙もカバンに入れ、二時間に一本しかないバスにどうにか乗り込んで、東京へと戻った。

新幹線に揺られる道すがら、祖母ちゃんの話は何度も読み返した。そして、封筒を取り出す。宛名は「藺村秋芳郎」となっている。差出人はもちろん「幸次」。中にはたった一枚の便箋。

『秋芳郎へ 迎えに行く』

僕の胸が大きく波打って、どうしてだか泣きそうになる。

もし、祖母ちゃんの話が本当だったなら、幸次大叔父の最初で最後の秋芳郎への手紙が、こんな大胆なラブレターだなんて、恋人泣かせもいいところだ。はやく秋吉に会いたい、と、僕の胸が急ぐ。

「で、この続きはてっちゃんが書くの？」

庭に出てきた秋吉は、懲りずに僕のことを後ろから抱きしめてくる。

「まさか。これは祖母ちゃんの記事みたいなもんだし、真実か嘘かもわからんし。無粋だよ」

「でも、どうなったのかな、この二人。幸せになれたのかなあ」

「祖母ちゃんは小説家だからねつ造もいくらもできるよ」

「ロマンチストのくせにリアリストだよ、てっちゃん」

首筋に熱い唇が落ちてくる。彼の髪の毛からは、僕と同じシャンプーの香りがするのに、秋吉の髪の毛は僕よりも何倍もいい匂いがする。気がする。彼の、茶色い猫っ毛を撫でると、より、匂いが際立つ。

「でも、すごくない？ 俺、仏蘭西人のクォーターで、目も蒼いし、なんてたって名前も『あきよし』だし」

「たまたまだよ、たまたま」

「うーん、でも、引きが強いと思うんだよなあ。てっちゃんの名前も、鉄地だし」

体の向きをくるりと回され、彼に抱きしめられる。自分より大きな相手に抱きしめられるのは気分がいい。

「あ、でも、そうかな」

「え？」

「秋吉も、美しいもんな。モデルだし」

「何それ、殺し文句？」

秋吉は相当嬉しかったらしく、僕のことを抱き上げて、目いっぱいキスの雨を降らせてきた。僕もキスを返す。

「けど、僕も、君のこと連れ去ったようなもんだよね」

「てっちゃんが迎えに来てくれてほんとにうれしかった。大好きだよ」

もともと、彼女がいて、僕の家とは違って温かな家族がいて、朗らかに育った彼を、こっちに引き込んだのは僕だ。ずっと罪悪感にさいなまれながら、それでもこの美しい恋人と生きる素晴らしさを、僕は別れが来るその日まで、ずっと抱き続けるのだと思う。

秋吉が僕を抱きしめたまま続ける。

「ま、この先どうなるかわかんないけど、好きな人と一緒にいられるって最高だと思う。きっと、秋芳郎って人も、幸次って人が迎えに来てくれるのを絶対に待ってたはずだし、迎えに来てくれたって俺は信じてる」

「うん」

「そりゃ俺、馬鹿だけど、てっちゃんと付き合うまでに色々考えたし、大変なことあるってのもわかってたけど、大切な人傷つけるってわかってたけど、そういうの打っ棄ってでも、てっちゃんと一緒にいたいって思った。だから、幸せになろうね」

互いの腕に力がこもった。

ふと彼の肩越しに見た夕焼け空は、どこまでも広がり、カラスの小さな影がどんどん遠ざかっていった。美しい夕空だった。

END